

おじいちゃんに教わったこと

西本 美緒（神奈川県横浜市・二十五歳）

おじいちゃん、ごめんね。

あのとき、横になっておじいちゃんの側にいてあげられなくて。

あのとき、手をぎゅっと握りしめてあげられなくて。

おじいちゃんは唯一の女の子の孫の私を、すごく可愛がってくれたよね。性格もよく似ていて、お互い頑固なところがあったから、たまに言い合うこともあったけど、夏休みやお正月は、一緒に旅行へ行ったり、買い物へ行ったり、タコ焼きやサンドイッチを作ったりしたよね。

おじいちゃんは料理を作っても、自分はタバコとお酒ばかりで、私やお母さんやおばあちゃんが美味しそうに食べるのをニコニコ眺めているだけだったよね。五分おきくらいに「美味しいか」「って聞くから、「しつこいなあ」なんて思っていたけれど、今なら何度でも言うよ。「美味しいよ」「って。

おじいちゃんは私たちが帰省したとき、おばあちゃんに駅まで迎えに行かせていたよね。

おばあちゃんは少しずつ認知症の症状が出ていたから、おじいちゃん、実は柱のかけからそっと見守っていたでしょ。目が合うと、サツと手をあげて、何事もなかったかのように先に家に帰っていたね。あのときお礼を言えてなかった。「ありがとうね。」って。

おじいちゃんは無理して私たちに料理をふるまって、キッチンの床で横になっていたよね。

あのときもうすでにガンがおじいちゃんの身体をむしばんでいたなんて思いもしなかった。

私、あの時立ったまま「そんなに無理して作らなくてもいいのに」って言ったよね。

今、もし戻れるのならおじいちゃんの側に寄り添って、細くて骨骨しい手をぎゅっと握りしめてこう言っただけだよ。「そんなに頑張らなくて大丈夫だよ」って。

結局私が手を握りしめてあげることができたのは病院のベッドの上だった。

私が握りしめたこと、わかった？声は届いていた？

おじいちゃんが亡くなってから、おじいちゃんに何度も話しかけているんだけど、聞こえている？

私ね、おじいちゃんに教わった気がするんだ。側にいてあげたいとき、手を握りしめてあげたいとき、声をかけてあげたいとき、ありがとうが言いたいとき、謝りたいときに、相手が近くにいる、それができることが、どれだけ奇跡的で、どれだけありがたいことか。

だから私は大切な人たちに、何度も何度も、しつこいくらいありがとうを言って、大好きと言って、側に寄り添って、手を握りしめてあげられるようになったよ。

おじいちゃん、本当にありがとうね。